

# 幕末明治初期の埼玉県域における種痘の様相

細野健太郎

The Character of Vaccination in Saitama Prefecture at the End of the Edo Era and the Beginning of the Meiji Period

はじめに

- ①牛痘種痘法が到来するまじ
- ②安政期種痘活動の展開
- ③明治初期の種痘活動  
おわりに

## 【編文解説】

現在の埼玉県域での種痘の実態は、これまでほとんど明らかにされてこなかった。本稿は、そうした状況をふまえ、幕末から明治初年にかけて比企郡で種痘の活動に携わった在村医小室家の動向などを通じて、県域の種痘の様相を明らかにしようと試みるものである。

嘉永二年に長崎に牛痘痂がもたらされ全国各地に伝播してゆくなか、小室家は江戸で藩医をつとめる門人より痘苗を入手する。それ以前には、牛痘種痘の手法と近似する人痘種痘が行われていた。武藏国では他の諸国と変わりない種痘に関する知識や痘苗伝播の事実が確認できるのである。だが、御領・私領の錯綜する地域性は、幕末に他国でみられる領主主導の展開とは異なる種痘の様相をもたらした。安政期をみると、蘭方医達のネットワークを通じた地域間での痘苗分配が行われつつ、医師達の種痘が行われていた。明治初年となり、現在の埼玉県には入間県や岩槻県、埼玉県（旧）

などが置かれる。それぞれの県が種痘に取り組むようになるなか、医師達は組織的に編成されるようになつていった。

本稿で検討を加えた地域は情報や痘苗の伝播の早さは他の地域と同様であるが、幕府倒壊まで広域的な種痘政策が展開されにくく、個別の在村医の主体性に依存せざるを得なかつたことがみてとれよう。